土曜
ASHUREY CLASS

原文で味わう詩篇

תהלים

No.31 (詩篇89篇②) 2025. 8. 09

「詩篇」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】ヨハネの福音書5章39～40節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、
聖書を調べています。
その聖書は、わたしについて証ししているものです。
40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るために
わたしのもとに来ようとはしません。

※イェシュアは私たちに聖書を正しく解釈することを教えています。それはイェシュアという鍵を入れ込むことで、初めて言わんとすることが見えてくるということです。
詩篇もそのように、預言的、奥義的、重層的に読んでいきたいと思います。
※詩篇は預言書です。詩篇の作者ダビデは、本体であるイェシュアを証ししています。
なぜなら、御子イェシュアはダビデの先取的存在だからです。

1. テキスト ①

【新改訳2017】詩篇89篇　エズラフ人エタンのマスキール。

1　私は　主の恵みを　とこしえに歌います。
　あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます。
2　私は言います。
「御恵みは　とこしえに打ち立てられ
　あなたはその真実を　天に堅く立てておられます。」
3「わたしは　わたしの選んだ者と契約を結び
　わたしのしもべダビデに誓う。
4　わたしは　あなたの裔をとこしえまでも堅く立て
　あなたの王座を代々限りなく打ち立てる。」セラ

2.「恵みと真実」①

●詩篇89篇の中で特異な語彙は「恵み」と「真実」です。

「恵み」は「ヘセド」(חֶסֶד)、「真実」は「エムーナー」(אֱמוּנָה)。

●1～4節には、ダビデ契約の特徴がこの二つの語彙によって明確に表されています。

1　私は　主の恵みをとこしえに歌います。
　　あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます。
2　私は言います。
「御恵みはとこしえに打ち立てられ
　　あなたはその真実を天に堅く立てておられます。」

2.「恵みと真実」②

●詩篇89篇の中で、「恵み」と「真実」がセットとして使われているのは以下の箇所です。

①14節
　義と公正はあなたの王座の基。恵みとまことが御前を進みます。
②24節
　わたしの真実とわたしの恵みは　彼(＝ダビデ)とともにあり
　わたしの名によって　彼の角は高く上げられる。
③28節
　わたしの恵みを　彼のために永遠に保つ。
　わたしの契約は彼にとって確かなもの(＝真実)である。

2.「恵みと真実」③

④33節

しかし　わたしは彼から恵みをもぎ取らず
わたしの真実を偽らない。

⑤49節

主よ　あなたのかつての恵みはどこにあるのでしょうか。
あなたは　真実をもってダビデに誓われたのです。

●それぞれの語彙が単独で使われている箇所は青色で記しています。

「恵み」・・1, 2, 5, 14, 24, 28, 33,　　49節に　８回。
「真実」・・1, 2, 5, 8,　24, 28, 33, 37, 49節に　９回。

※ただし28, 37節は動詞「アーマン」(אָמַן)の受動分詞を使用。

3.「恵み」(ヘセド)

●「ヘセド」を新改訳は「恵み」と訳し、新共同訳は「慈しみ」と訳しています。英語のNIV(New International Version)訳では、①love(129)、②kindness(41)、③unfailing love(32)、④great love(6)、⑤mercy(6)　などと訳されています。

●他の英語訳も調べてみると「確固たる不変の愛」を意味します。①steadfast love、②covenant love 、③constant love、④unfailing love、⑤loving-kindness　といった訳もあります。unfailing love とは「尽きることのない、絶えることのない、信頼に足る、裏切ることのない、確実な愛」という意味です。

4.「まこと(＝真実、エムーナー)」

●「まこと」は「エメット」(אֱמֶת)、ないしは「エムーナー」(אֱמוּנָה)が使われます。いずれも女性名詞ですが、語源は動詞「アーメン」(אָמַן)です。「アーマン」は「信じる、信頼する、確かである」という意味です

●イェシュアはしばしば「まことに、まことに」(アーメーン：אָמֵן)と言われましたが、「アーメーン」は副詞です。名詞にしても、副詞にしても、動詞にしても、それらは「神の約束は真実であり、確かであり、信頼されるべきもの」という意味です。神のご計画や神の約束に対する絶対的な信頼を意味することばです。

5.「主の恵みと真実の証し」①

●創世記8章21節には「主の独白」が記されています。つまり、主がご自身に向かって誓ったことばです。

【新改訳2017】創世記8章21節
主は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で主はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらしはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。・・」

●これは、主が心に中で語った一部分です。再び、大洪水によってすべての生き物を打ち滅ぼしたりは決してしないという本当の原因を、ノアには語っていません。なぜでしょう。神のみこころを知り尽くされている聖霊が、6章5～7節でも主の独白を記しています。

5.「主の恵みと真実の証し」②

【新改訳2017】創世記6章5～7節
5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、
いつも悪に傾くのをご覧になった。
6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。
7 そして主は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。
人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを
造ったことを悔やむ。」

●人々が悪に傾き、暴虐で満ちているゆえに彼らと地に住むすべてのものを滅ぼすことを語っています。しかし、主が人を造ったことを悔やみ、心を痛められた心の内をノアには伝えていません。なぜでしょう。私が思うに、人の心に図ることがみな、いつも悪に傾くという事は、神ご自身の課題だからです。

5.「主の恵みと真実の証し」③

●たとえ悪のゆえに人を滅ぼしたとしても、神が創造の冠として人間を創造された目的は矯正することはできません。ノアとその家族は救われましたが、神はその家族の中に悪の根があるのをすでにご存知だったのです。神の救いの歴史とは、まさにこの問題を神の課題として取り組まれる歴史なのです。そのために、神は一人の人物アブラハムをお選びになり、彼をとおしてすべての者が神の祝福を得ることができる道を備えられたのです。所詮、悪に傾く人間をどのように再創造するのか、どのように神がこの課題と取り組まれるのか。そのヒントが創世記6章8節にあります。そこには「ノアは主の心にかなっていた」とあります。

5.「主の恵みと真実の証し」④

●創世記6章8節を原文で見てみましょう。

アドナイ　ベエーネー　ヘーン　マーツァー　ノーアッハ

נֹחַ מָצָא חֵן בְּעֵינֵי יְהוָה

●逐語的に訳すと「ノアは、見出した、恵みを、目の中に、主の」となります。つまり「ノアは主のまなざしの中に恵みを見出した」のです。それが「主の心にかなった」と訳されているのです。このことが重要です。ちなみに「心にかなっていた」のヘブル語は「ヘーン」(חֵן)です。「ヘーン」の語源は「ハーナン」(חָנַן)で「あわれむ」です。「ノアは主のまなざしの中にあわれみを見出した」とも言えます。後のサウル(パウロ)も、主の弟子アナニアによって神のあわれみを見出した人でした。「彼の目から鱗のようなものが落ちた」とはそのことを表しています。

5.「主の恵みと真実の証し」⑤

●人は律法的な脅しによって変えられることはありません。ただ神の恵み、神の一方的な気前良さ、神の好意、神の恩寵だけが人を作り変え得ます。それが神の課題です。神はアブラハムを選び出し、神のまなざしの中に神の恵みと真実を見出させるために、つまり、神はアブラハムが神の約束をどこまでも信じていく「信仰のモデル」となるように育てていかれました。なぜなら、神の恵みは信仰という通路を通して注がれていくからです。聖書はノアという人物の中に、アブラハムにつながるものがあることを示唆しているのです。

●創世記16章の出来事は、信仰の父といわれるアブラハムの生涯における最も大きな失敗を記しています。

5.「主の恵みと真実の証し」⑥

●アブラハムはその失敗によって、13年間、神の不在経験を余儀なくされました。神からの呼びかけを聞くこともなく、神からの新しい導きも一切ありませんでした。むしろ、逆に家庭内にいろいろな問題を引き起こす要因となってしまったばかりか、4千年後の今日に至ってもその問題は引きずっているのです。

●16章のような出来事は、信仰者のだれもが必ず引き起こす問題です。それは神から与えられた約束を、私たちの方で実現しなければならないと考えてしまうことからもたらされる失敗です。「失敗は成功のもと」という格言があるように、神を信じる人生においても、私たちは多くの失敗の痛みを通して、多くのことに気づかされて成長していくものです。やがてイスラエルの民も自分たちの国を失うという痛みを経験しながら、はじめて神の教え(トーラー)を喜びとし、昼も夜もそれを口ずさむというライフスタイルを形成します。「苦しみに会ったことは、私にとって幸いでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇119:71)とあるように、この告白は自らの失敗を通して学んだ結実でした。

5.「主の恵みと真実の証し」⑦

●アブラハムの全生涯を客観的に考えると、彼に対する神の教育的プログラムの中に失敗の経験が無駄なく組み込まれているように見えます。失敗それ自体は辛く痛みを伴いますが、それがやがて益となり、アブラハムをして「信仰の父」として導かれた神の恵みと真実に心を留めていく必要があります。16章のアブラハムからいくつかのことを学びたいと思います。

●12章、13章、15章において、あなたの子孫は砂の数ほど、星の数ほどになるという「子孫繁栄」の約束をアブラハムは信じることによって、神から義と認められました。神の一方的な約束において、アブラハムに求められたことはただ信じることだけです。しかしその約束は神ご自身が実現するものであることを、アブラハムはまだ知りませんでした。神に従ってすでに10年が経過していましたが、約束と現実とのギャップはあまりにも大きく、子どもは一人として与えられませんでした。

5.「主の恵みと真実の証し」⑧

●このようなときに、私たちは二通りの仕方で対処しようとします。ひとつは、「神を信頼して、主の時を忍耐強く待つ」という仕方です。もうひとつは、「ただ祈って待っているだけではだめだ。やはり、自分たちのほうでも知恵を用いて何らかの具体的な行動を起こさなければならない」と考えて行動してしまう仕方です。アブラムとサライは後者の方を選びました。私たちの多くが、待つという状態に置かれることに耐えられず、自ら行動を起こしてしまうことが多いものです。神の約束を祈って待つということがとても難しく思えるのです。これは信仰のテストです。信仰が本物であるかどうかの試金石は、待つという忍耐力です。変化がなくても、状況がなにも変わらなくても、常に平静な心で対処できるのは信仰がなければできないことです。神の約束が実現するための神ご自身の時と方法があるということを、アブラハムは身をもって知ることになります。

5.「主の恵みと真実の証し」⑨

●アブラハムの失敗の要因は「サライの言うことを聞き入れた」という点にあります。最初の人アダムも妻のエバが善悪の知識の木の「実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた」のですから、同じ問題を引きずっています。妻のサライは神の約束を待てず、人間的な画策によって、神の手助けをしなければならないと考えて夫に提案しました。「ご覧ください。主は私が子を産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう」。アブラハムはサライの言うことを聞き入れました。

●主の約束は「あなた自身から生まれ出て来る者が」と言われていたので、妻サライから生まれなくても、アブラハムの子であれば主のことばに反することにはならないのではないか、神の約束の実現に向けた(妥協的な)方策を妻のサライが自分なりに熟慮した上での提案でした。このように、いかにも自然体で、あまりにも常識的で、しかも最も身近な(親しい)者からの説得力のある提案を退けることはとても難しいことがわかります。

5.「主の恵みと真実の証し」⑩

●ところが、二人が選んだ方法は良い結果をもたらしませんでした。むしろ事態はサライの思いとは全く逆の方向に動き出し、より悪い結果となります。当初、妻のサライと女奴隷ハガルの間に良い信頼関係がありました。しかしハガルが身ごもったときから、ハガルは女主人であるサライを見下げるようになり、態度がすっかり変わってしまいます。まさに想定外とはこのことです。不和と争いがもたらされました。女主人のサライはハガルをいじめました。この「いじめた」と訳された動詞はヘブル語の「アーナー」(עָנָה) で「ひどく苦しめた、虐待した」という意味です。イスラエルの民がエジプトで四百年の間、苦しめられた(創15:13)で使われています。「つらく当たる、いじめる、虐待する」女主人に耐え切れなくなった身重のハガルは、そこから逃げ出してしまいます。

5.「主の恵みと真実の証し」⑪

●主の使い(＝受肉前のイエシュア)はそのハガルを見つけ、「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と尋ねました。罪を犯したアダムに主が「あなたは、どこにいるのか」と尋ねたことと似ています。主の使いはハガルに「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして彼女のもとで身を低くしなさい」(16:9)と語り、彼女から生まれる子の子孫に対する祝福を告げました。これは、ハガルが女主人に対して謙遜に(従順に)仕えることが真の解決であることを告げたことを意味します。さらに主の使いは、ハガルが身ごもっている子は男の子であり、イシュマエルと名づけるよう語りました。この主の呼びかけに対して、ハガルは「アッター(אַתָּה)・エール(אֵל)・ロイー(רֳאִי) 」と言います。それは「あなたは私を顧みられる神」という意味です。

5.「主の恵みと真実の証し」⑫

●ハガルは女主人の冷酷な扱いを引き起こした自分の傲慢さと荒野での孤独の中で、自分に語ってくださる主と出会いました。「あなたはどこから来ても、どこへ行こうとしているのか。自分の立場をわきまえつつ、自分の本来居るべきところに身を低くして、そこで仕えなさい」と諭されたとき、それは彼女にとって心地の良いことばではありませんでした。しかしその語りかけの中に、彼女は自分を顧みてくださっている神の愛を感じたはずです。ハガルは奴隷としての自分の立場をわきまえず、女主人に対して高ぶり、それが自分に苦しみをもたらす結果となりましたが、彼女も失敗の痛みを経験したのです。主は彼女をそこから立ち直らせようとしてくださったのです。アブラムとサラに対しても、17章から主の立ち直りが備えられているのです。ここに主の恵みと真実があります。

5.「主の恵みと真実の証し」⑬

【新改訳2017】ヨハネの福音書1章14節、17節

14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の
栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。
この方は恵みとまことに満ちておられた下名です。。

17 というのは、律法はモーセによって与えられ、
恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

●「恵み」と「まこと」は、死からよみがえったイェシュアが「いのちを与える霊」を人の霊の中に与えることで実現したのです。それが目に見える形で表されるのは、イェシュアが王として再臨されるときなのです。

今日のまとめ

●キリストの福音とは、神である主が明らかに失敗と見える中でも私たちとともにおられ、ご自身の愛で私たちを取り扱ってくださるという事実です。人の失敗は、神の愛のあふれる場なのです。それゆえ私たちは自分の惨めさにではなく、神の愛のまなざしである恵みと真実に目を注がなければなりません。

●神の歴史(His story)は、それを証しする神の作業場なのです。
御国は王なるイェシュアの恵みと真実に与った者が集結する場です。

「義と公正はあなたの王座の基。恵みとまことが御前を進みます。」